

かわはら かずま
川原 和真さん

JICA 海外協力隊 2019 年度 1 次隊

派遣国：パラオ 職種：環境教育

2022 年 3 月 27 日（日）中国新聞 SELECT 掲載

※中国新聞社の許諾を得ています



高い環境意識から学ぶ

「私たちは今でも自然を使い、自然に生かされているの」。環境教育隊員として活動した半年で、最も印象に残っている言葉だ。

派遣されたのは 2019 年 8 月。環境保全系の NPO 団体で、子どもたちを対象に Sensei（パラオ語で先生）として授業をした。戦前に日本の統治下にあったパラオでは多くの日本語が現地の言葉として残っていて、驚くほど自然に使われている。

振り返ると支援的な側面よりも、現地の人や活動から学ぶ機会の方が圧倒的に多かったと思う。活動中に子どもたちと森を歩いていると、現地のお母さんが「この実は食べられる」「この花の種をつぶして化粧をしたのよね」と話してくれた。子どもの反応は明らかに積極的になり、楽しそうに植物に触れ始めた。「紙がない時代はこの葉っぱを使ってたのよ。だからこれはトイレットペーパーの木ね」という小話は太ウケだった。

パラオの人たちは自然が大好きだ。大人も子どもも海で泳ぎ、森で食料を採る。自然の一部として生きること感謝と幸せを感じている。環境に関する会議を開けば、地域住民が大勢集まり議論を交わす。環境への意識が高いのはパラオだろうか、日本だろうか？私には答えが明白だった。

現在、岡山県の西栗倉百年の森林協同組合で林業に携わっている。日本の人工林は 30 年にわたって放置され、社会生活の基盤である環境への影響が懸念されている。地域産材をビジネスとして有効活用し、人と森の健全な関係を取り戻したいと移住を決意した。パラオでの気づきが、今の活動へと導いてくれたと思っている。



島でのごみ拾いに参加してくれた学生たち